

激動の幕末・明治維新史料

第13回 講義 長州征伐（中村先生）

1 班広報担当 2022年10月11日

10月5日に55歳の誕生日を迎えられた中村先生。まだまだ書かねばならない論文があるものの一方、京都文化博物館で催されている「新選組展」での講演準備もありお忙しいご様子である。本日は配布資料無し。配布済の「第一次長州征討」「薩長同盟成立」を中心に講義があった

<講義の内容>

- ・元治元年(1864)10月、尾張慶勝が征長総督、越前茂昭が副総督に就任。
西国諸藩を中心とする35藩で約15万人の征長軍を編成。参謀は薩摩藩の西郷隆盛。
慶勝は実際に戦となれば莫大な戦費がかかるので、開戦には消極的であった。参謀の西郷隆盛も「長州がつぶれると次は薩摩がやられる」と考え長州藩の早期降伏による戦の回避を目指した。
- ・11月、長州で三家老の切腹、四参謀の斬首。更に降伏条件として「藩主父子の謝罪文提出」「五卿の追放」「山口城の破却」で決定。戦に発展することなく第一次長州征伐は終了。
- ・越前茂昭含めて幕府側から処分の甘さに対し不満があったが、西郷隆盛が説得し抑え込んだ。

- ・このころ、「天狗党」西上・京都接近の報が入る。
天狗党は水戸藩の攘夷(横浜鎖港)を主張する過激派集団である。禁門の変の発生により、孝明天皇が長州藩の征討を優先するように命令を出したため、横浜鎖港は後回しとなった。そこで天狗党は同じ水戸藩出身の慶喜を通して禁裏に尊王攘夷の主張を伝えようと京都に向かっていた。ところが、頼りの慶喜が自ら天狗党の討伐の指揮を執っていることを知り、天狗党は降伏した。天狗党は828名が捕らえられ352名が斬首刑となった。慶喜は身内にも厳しかった。

- ・第一次長州征伐後、長州内では高杉晋作や伊藤博文らの急進派が長府の功山寺で拳兵。「元治の内乱」と呼ばれる戦いの末、藩の政府軍を破り、実権を掌握し再び攘夷の気運上昇。これを受けて、幕府では第二次長州征伐を決め、将軍家茂が京都・大阪へ向かうことになった。これに対し、「薩長同盟」が画策されていた。土佐の坂本龍馬が大きな役割を果たしたと、小説・TV等では言われているがこれは「間違い」。詳細は次回の授業への持ち越しとなった(残念)。

<中村先生からの情報、アドバイス>

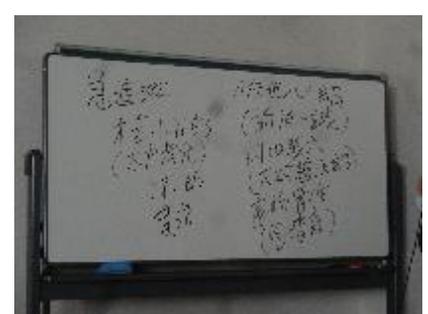
- ・歴史を観る時には、「いつ」ということを意識して欲しい。
例えば「二条城」。接客の間と書かれていても「いつの話？」の意識が必要。幕末に家茂が上洛する以前、最後に上洛した将軍は1634年の三代将軍家光であり約230年主人は不在であった。



昔の伏見。巨椋池が見える。



十二支について解説。



長州急進派の名前。